

# 土神ときつね

宮沢賢治

青空文庫



## (一)

一本木の野原の、北のはずれに、少し小高く盛りあがった所がありました。いのころぐさがいつぱいに生え、そのまん中には一本の綺麗な女の樺の木がありました。

それはそんなに大きくはありませんでしたが幹はてかてか黒く光り、枝は美しく伸びて、五月には白い花を雲のようにつけ、秋は黄金や紅やいろいろの葉を降らせました。

ですから渡り鳥のかっこうや百舌も、又小さなみそさざいや目白もみんなこの木に停まりました。ただもしも若い鷹などが来て

いるときは小さな鳥は遠くからそれを見付けて決して近くへ寄りませんでした。

この木に二人の友達がありました。一人は丁度、五百歩ばかり離れたぐちやぐちやの谷地やちの中に住んでいる土神で一人はいつも野原の南の方からやって来る茶いろの狐きつねだったのです。

樺の木はどちらかと云いえば狐の方が好きでした。なぜなら土神の方は神という名こそついてはいましたがごく乱暴で髪かみもぼろぼろの木綿糸の束たばのよう眼めも赤くきものだつてまるでわかめに似、いつもはだしで爪つめも黒く長いのでした。ところが狐の方は大へんに上品な風で滅多めったに人を怒おこらせたり気にさわるようなことをしなかつたのです。

ただもしよくよくこの二人をくらべて見たら土神の方は正直で狐は少し不正直だったかも知れません。

(二)

夏のはじめのある晩でした。樺には新らしい柔らかな葉がいっぱいについていいかおりがそこら中いっぱい、空にはもう天の川がしらしらと渡り星はいちめんふるえたりゆれたり灯つたり消えたりしていました。

その下を狐が詩集をもつて遊びに行つたのでした。仕立おろしの紺こんの背広を着、赤あかがわ革がわの靴くつもキツキツと鳴つたのです。

「実にしずかな晩ですねえ。」

「ええ。」樺の木はそつと返事をしました。

「さそり蠍ぼしが向うを這はつていますね。あの赤い大きなやつを昔むかしは支

那なでは火かと云つたんですよ。」

「火星とはちがうんでしょうか。」

「火星とはちがいますよ。火星は惑わくせい星せいですね、ところがあいつ

は立派な恒こうせい星せいなんです。」

「惑星、恒星ってどういうんですの。」

「惑星というのはですね、自分で光らないやつです。つまりほかから光を受けてやっと光るように見えるんです。恒星の方は自分で光るやつなんです。お日さまなんかは勿もちろん論ろん恒星ですね。あん

なに大きくてまぶしいんですがもし途方とほうもない遠くから見たらや  
つぱり小さな星に見えるんでしょうね。」

「まあ、お日さまも星のうちだったんですわね。そうして見ると  
空にはずいぶん沢たくさん山のお日さまが、あら、お星さまが、あらや  
つぱり変だわ、お日さまがあるんですね。」

狐は鷹揚おうように笑いました。

「まあそうです。」

「お星さまにはどうしてああ赤いのや黄のや緑のやあるんでしょ  
うね。」

狐は又鷹揚とうでに笑って腕を高く組みました。詩集はぷらぷらしま  
したかなかなかそれで落ちませんでした。

「星に橙だいたいや青やいろいろある訳ですか。それは斯こうです。全体星というものははじめはぼんやりした雲のようなもんだつたんです。いまの空にも沢山あります。たとえばアンドロメダにもオリオンにも獵犬座りょうけんざにもみんなあります。獵犬座のは渦巻うずまきです。それから環状星雲リングネビュラというのもあります。魚の口の形ですから魚フィッシュの口。星雲とも云いますね。そんなのが今の空にも沢山あるんです。」

「まあ、あたしいつか見たいわ。魚の口の形の星だなんてまあどんなに立派でしょう。」

「それは立派ですよ。僕ぼく水沢の天文台で見ましたがね。」

「まあ、あたしも見たいわ。」

「見せてあげましょう。僕実は望遠鏡を独乙ドイツのツアイスに注文してあるんです。来年の春までには来ますから来たらずぐ見せてあげましょう。」狐は思わず斯う云つてしまいました。そしてすぐ考えたのです。ああ僕はたった一人のお友達にまたつい偽うそを云つてしまった。ああ僕はほんとうにだめなやつだ。けれども決して悪い気で云つたんじやない。よろこばせようと思つて云つたんだ。あとですつかり本当のことを云つてしまおう、狐はしばらくしんとしながら斯う考えていたのでした。樺の木はそんなことも知らないでよろこんで言いました。

「まあうれしい。あなた本当にいつでも親切だわ。」

狐は少し悄しよげ気ながら答えました。

「ええ、そして僕はあなたの為ためならばほかのどんなことでもやりますよ。この詩集、ごらんなさいませんか。ハイネという人のです。翻訳ほんやくですけれども仲々よくできてるんです。」

「まあ、お借りしていいんでしょうかしら。」

「構いませんとも。どうかゆつくりごらんなすつて。じゃ僕もう失礼します。はてな、何か云い残したことがあるようだ。」

「お星さまのいろのことですわ。」

「ああそうそう、だけどそれは今度にしましょう。僕あんまり永くお邪魔じやましちやいけないから。」

「あら、いいんですよ。」

「僕又来ますから、じゃさよなら。本はあげてきます。じゃ、さ

よなら。「狐はいそがしく帰って行きました。そして樺の木はその時吹いて来た南風にざわざわ葉を鳴らしながら狐の置いて行った詩集をとりあげて天の川やそらいちめんの星から来る微かなあかりにすかして頁を繰りました。そのハイネの詩集にはロウレライやさまざま美しい歌がいっぱいにあつたのです。そして樺の木は一晚中よみ続けました。ただその野原の三時すぎ東から金きんぎゆ牛うきゆう宮みやののぼるころ少しとろとろしたただけでした。

夜があげました。太陽がのぼりました。

草には露がきらめき花はみな力いっぱい咲きました。

その東北の方から熔けた銅の汗をからだ中に被ったように朝日をいっばいに浴びて土神がゆっくりゆっくりやって来ました。い

かにも分別くさそうに腕を拱こまねきながらゆっくりゆっくりやって来たのでした。

樺の木は何だか少し困ったように思いながらそれでも青い葉をきらきらと動かして土神の来る方を向きました。その影かげは草に落ちてちらちらちらちらゆれました。土神はしずかにやって来て樺の木の前に立ちました。

「樺の木さん。お早う。」

「お早うございます。」

「わしはね、どうも考えて見るとわからんことが沢山ある、なかかわからんことが多いもんだね。」

「まあ、どんなことでございますの。」

「たとえばだね、草というものは黒い土から出るのだがなぜこう青いもんだらう。黄や白の花さえ咲くんだ。どうもわからんねえ。」

「それは草の種子が青や白をもっているためではないでございませうか。」

「そうだ。まあそう云えばそうだがそれでもやっぱりわからん。たとえば秋のきのこのようなものは種子もなし全く土の中からはかり出て行くもんだ、それにもやっぱり赤や黄いろやいろいろある、わからんねえ。」

「狐さんにも聞いて見ましたらいかがでございませう。」

樺の木はうっとり昨夜ゆうべの星のはなしをおもっていましたのでつ

い斯こう云つてしまいました。

この語ことばを聞いて土神は俄にわかに顔いろを変えました。そしてこぶしを握にぎりました。

「何だ。狐？ 狐が何を云い居おつた。」

樺の木はおろおろ声になりました。

「何も仰おつしやったんではございませんがちよつとしたらご存知かと思いましたが。」

「狐なんぞに神が物を教わるとは一体何たることだ。えい。」

樺の木はもうすっかり恐こわくなつてぷりぷりぷりぷりゆれました。土神は齒をきしきし噛かみながら高く腕を組んでそこらをおそあるきまわりました。その影はまっ黒に草に落ち草も恐おそれて顫ふるえたのです。

「狐この如ごときは実に世の害悪だ。ただ一言もまことはなく卑怯ひきようでおくびよう臆病おくびようでそれに非常に妬ねたみ深いのだ。うぬ、畜生ちくしようの分際ぶんざいとして。」

樺の木はやつと気をとり直して云いました。

「もうあなたの方のお祭も近づきましたね。」

土神は少し顔色やわらを和わげました。

「そうじゃ。今日は五月三日、あと六日だ。」

土神はしばらく考えていました。が俄かに又声あを暴あらげました。

「しかしながら人間どもは不届ふとどきだ。近頃ちかごろはわしの祭にも供物くもつ

一つ持って来ん、おのれ、今度わしの領分に最初に足を入れたも

のはきつと泥どろの底に引き擦すり込こんでやろう。」土神はまたきりき

り齒噛みしました。

樺の木は折角せつかくなだめようと思つて云つたことが又もや却かえつてこんなことになつたのでもうどうしたらいいかわからなくなりただちらちらとその葉を風にゆすつていました。土神は日光を受けてまるで燃えるようになりながら高く腕を組みキリキリ齒噛みをしてその辺をうろろろしていましたが考えれば考えるほど何もかもしやくにさわつて来るらしいのでした。そしてとうとうこらえ切れなくなつて、吠ほえるようになつて荒あら々あらしく自分の谷地やちに歸つて行つたのでした。

土神の棲すんでいる所は小さな競馬場ぐらいある、冷たい湿地しっちで苔こけやからくさやみじかい蘆あしなどが生えていましたが又また所々にはあざみやせいの低いひどくねじれた楊やなぎなどもありました。

水がじめじめしてその表面にはあちこち赤い鉄しづの澆わが湧わきあがり見るからどろどろで気味も悪いのでした。

そのまん中の小さな島のようになった所に丸太こしらで拵こしらえた高さ一間ばかりの土神の祠ほこらがあつたのです。

土神はその島に帰つて来て祠の横に長々と寝ねそべりました。そして黒い瘡やせた脚あしをがりがり搔かきました。土神は一羽の鳥が自分の頭の上をまつすぐに翔かけて行くのを見ました。すぐ土神は起き

直つて「しっ」と叫びました。鳥はびっくりしてよろよろと落ちそうになりそれからまるではねも何もしびれたようにだんだん低く落ちながら向うへ遁げて行きました。

土神は少し笑つて起きあがりました。けれども又すぐ向うの樺の木かばの立っている高みの方を見るとはつと顔色を変えて棒立ちになりました。それからいかにもむしゃくしゃするといふ風にそのぼろぼろの髪の毛かみけを両手で搔きむしっていました。

その時谷地の南の方から一人の木樵きこりがやって来ました。三つ森山の方へ稼かせぎに出るらしく谷地のふちに沿つた細い路みちを大股おおまたに行くのでしたがやつぱり土神のことは知っていたと見えて時々気づかわしそうに土神の祠の方を見していました。けれども木樵には

土神の形は見えなかつたのです。

土神はそれを見るとよろこんでぱつと顔を熱ほてらせました。それから右手をそつちへ突つき出して左手でその右手の手首をつかみこつちへ引き寄せるようにしました。すると奇き体たいなことは木樵はみちを歩いていると思ひながらだんだん谷地の中に踏ふみ込んで来るようでした。それからびつくりしたように足が早くなり顔も青ざめて口をあいて息をしました。土神は右手のこぶしをゆつくりぐるつとまわしました。すると木樵はだんだんぐるつと円くまわつて歩いていきましたがいよいよひどく周章あわでだしてまるではあはあはあはあしながら何べんも同じ所をまわり出しました。何でも早く谷地から遁にげて出ようとするらしいのでしたがあせつてもあせ

つても同じ処ところを廻まわっているばかりなのです。とうとう木樵はおろおろ泣き出しました。そして両手をあげて走り出したのです。土神はいかにも嬉うれしそうににやにやにやにや笑って寝そべったままそれを見ていました。が間もなく木樵がすっかり逆上のぼせて疲つかれてばたつと水の中に倒たおれてしまいますと、ゆつくりと立ちあがりました。そしてぐちやぐちや大股にそつちへ歩いて行って倒れている木樵のからだを向うの草はらの方へぼんと投げ出しました。木樵は草の中にどしりと落ちてううんと云いながら少し動いたようでしたがまだ気がつきませんでした。

土神は大声に笑いました。その声はあやしい波になって空の方へ行きましました。

空へ行つた声はまもなくそつちからはねかえつてガサリと樺の木の処にも落ちて行きました。樺の木ははつと顔いろを変えて日光に青くすきとおらせわしくせわしくふるえました。

土神はたまらなそうに両手で髪を掻きむしりながらひとりで考えました。おれのこんなおもしろ面白くないというのは第一は狐きつねのためだ。狐のためよりは樺の木のためだ。狐と樺の木とのためだ。けれども樺の木の方はおれは怒おこつてはいないのだ。樺の木を怒らないためにおれはこんなにつらいのだ。樺の木さえどうでもよければ狐などはなおさらどうでもいいのだ。おれはいやしいけれどもとにかく神の分際だ。それに狐のことなどを気になければならないというのは情ない。それでも気にかかるから仕方ない。

樺の木のことなどは忘れてしまえ。ところがどうしても忘れられない。今朝は青ざめて顫えたぞ。あの立派だったこと、どうしても忘られない。おれはむしやくしやまぎれにあんなあわれな人間などをいじめたのだ。けれども仕方ない。誰だつてむしやくしやしたときは何をするかわからないのだ。

土神はひとりで切ながつてばたばたしました。空を又一疋の鷹が翔けて行きましたが土神はこんどは何とも云わずだまつてそれを見ました。

ずうつとずうつと遠くで騎兵の演習らしいパチパチパチ塩のはぜるような鉄砲の音が聞えました。それから青びかりがどくどくと野原に流れて来ました。それを呑んだためかさっきの草

の中に投げ出された木樵はやつと気がついておずおずと起きあがりしきりにあたりを見廻しました。

それから俄かに立つて一目散に遁げ出しました。三つ森山の方へまるで一目散に遁げました。

土神はそれを見て又大きな声で笑いました。その声は又青ぞらの方まで行き途とちゆう中から、バサリと樺の木の方へ落ちました。

樺の木は又はつと葉の色をかえ見えない位こまかくふるいました。

土神は自分のほこらのまわりをうろうろ何べんも歩きまわつてからやつと気がしずまったと見えてすつと形を消し融とけるようにほこらの中へ入って行きました。

## (四)

八月のある霧きりのふかい晩でした。土神は何とも云えずさびしくてそれにむしやくしやして仕方ないのでふらつと自分の祠ほこらを出ました。足はいつの間にかあの樺の木の方へ向っていたのです。本当に土神は樺の木のことを考えるとなぜか胸がどきつとするのでした。そして大へんに切なかつたのです。このごろは大へんに心持が變つてよくなっていたのです。ですからなるべく狐のことなど樺の木のことなど考えたくないと思つたのでしたがどうしてもそれがおもえて仕方ありませんでした。おれはいやしくも神じゃ

ないか、一本の樺の木がおれに何のあたひがあると毎日毎日土神は繰り返して自分で自分に教えました。それでもどうしてもかなくして仕方なかつたのです。殊ことにちよつとでもあの狐のことを思ひ出したらまるでからだか灼やけるくらい辛つらかつたのです。

土神はいろいろ深く考え込みながらだんだん樺の木の近くに参りました。そのうちとうとうはつきり自分が樺の木のとこへ行こうとしているのだということに気が付きました。すると俄にわかに心持がおどるようになりました。ずいぶんしばらく行かなかつたのだからことによつたら樺の木は自分を待っているのかも知れない、どうもそうらしい、そうだとすれば大へんに気の毒だというような考かんがえが強く土神に起つて来ました。土神は草をどしどし踏み胸を

踊おどらせながら大股おおまたにあるいて行きました。ところがその強い足

なみもいつかよろよろしてしまい土神はまるで頭から青い色のかなしみを浴びてつつ立たなければなりませんでした。それは狐が来ていたのです。もうすっかり夜でしたが、ぼんやり月のあかりによどぬれた霧の向うから狐の声が聞えて来るのでした。

「ええ、もちろんそうなんです。器械的にシインメトリ対称の法則にはばかりかな叶っているからつてそれで美しいというわけにはいかないんです。それは死んだ美です。」

「全くそうですわ。」しずかな樺の木の声がしました。

「ほんとうの美はそんな固定した化石した模型のようなもんじやないんです。対称の法則に叶うつて云ったつて実は対称の精神を

有<sup>も</sup>っているというぐらいのことが望ましいのです。」

「ほんとうにそうだと思いますわ。」樺の木のやさしい声が又しました。土神は今度はまるでべらべらした桃<sup>もも</sup>いろの火でからだ中燃<sup>も</sup>されているようにおもいました。息がせかせかしてほんとうにたまらなくなりました。なにがそんなにおまえを切なくするのか、高<sup>たか</sup>が樺の木と狐との野原の中でのみじかい会話ではないか、そんなものに心を乱されてそれでもお前は神と云えるか、土神は自分で自分を責めました。狐<sup>きつね</sup>が又云いました。

「ですから、どの美学の本にもこれくらいのごことは論じてあるんです。」

「美学の方の本沢<sup>たくさん</sup>山<sup>さん</sup>おもちですの。」樺の木はたずねました。

「ええ、よけいもありませんがまあ日本語と英語と独乙語ドイツのなら大抵たいていありますね。伊太利イタリーのは新らしいんですがまだ来ないんです。」

「あなたのお書齋しよさい、まあどんなに立派でしょうね。」

「いいえ、まるでちらばってますよ、それに研究室兼用ですからね、あつちの隅すみには顕微鏡けんびきようこつちにはロンドンタイムス、大理石のセイザアがころがったりまるつきりごつたごたです。」

「まあ、立派だわねえ、ほんとうに立派だわ。」

ふんと狐の謙遜けんそんのような自慢じまんのような息の音がしてしばらくしいんとなりました。

土神はもう居ても立っても居られませんでした。狐の言っ

るのを聞くと全く狐の方が自分よりはえらいのでした。いやしくも神ではないかと今まで自分で自分に教えていたのが今度はできなくなつたのです。ああつらいつらい、もう飛び出して行つて狐を一裂ひとさきに裂いてやろうか、けれどもそんなことは夢ゆめにもおれの考えるべきことじゃない、けれどもそのおれというものは何だ結局狐にも劣おとつたもんじゃないか、一体おれはどうすればいいのだ、土神は胸をかきむしるようにしてもだえました。

「いつかの望遠鏡まだ来ないんですの。」樺の木がまた言いました。

「ええ、いつかの望遠鏡ですか。まだ来ないんです。なかなか来ないです。欧おうしゅう州航路は大分混乱してますからね。来たらすぐ

持つて来てお目にかけますよ。土星の環わなんかそれあ美しいんですからね。」

土神は俄に両手で耳をおき押えて一目散に北の方へ走りました。だまつていたら自分が何をおそするかわからないのが恐ろしくなつたのです。

まるで一目散に走つて行きました。息がつづかなくなつてばかり倒れたたおところは三つ森山の麓ふもとでした。

土神は頭の毛をかきむしりながら草をころげまわりました。それから大声で泣きました。その声は時でもない雷かみなりのように空へ行つて野原中へ聞えたのです。土神は泣いて泣いて疲つかれてあけ方ほんやり自分の祠もどに戻りました。

## (五)

そのうちとうとう秋になりました。樺かばの木はまだまっ青でしたがその辺のいのころぐさはもうすっかり黄金きんいろの穂ほを出して風に光りところどころすずらんの実も赤く熟しました。

あるすきとおるように黄金きんいろの秋の日土神は大へん上機嫌じょうきげんでした。今年の夏からのいろいろなつらい思いが何だかぼうつとみんな立派なもやのようなものに変つて頭の上に環になつてかかつたように思いました。そしてもうあの不思議に意地の悪い性質もどこかへ行つてしまつて樺の木なども狐きつねと話したいなら話すが

いい、両方ともうれしくはなすのならほんとうにいいことなんだ、今日はそのことを樺の木に云つてやろうと思ひながら土神は心も軽く樺の木の方へ歩いて行きました。

樺の木は遠くからそれを見ていました。

そしてやつぱり心配そうにぶるぶるえて待ちました。

土神は進んで行つて気軽にあいさつ挨拶しました。

「樺の木さん。お早う。実にいい天気だな。」

「お早うございます。いいお天気でございます。」

「天道てんとうというものはありがたいもんだ。春は赤く夏は白く秋は

黄いろく、秋が黄いろになると葡萄ぶどうは紫むらさきになる。実にありがたい

もんだ。」

「全くでございます。」

「わしはな、今日は大へんに氣ぶんがいいんだ。今年の夏から実にいろいろつらい目にあつたのだがやつと今朝けさからにわかにか心に気持ちが軽くなった。」

樺の木は返事しようとしましたがなぜかそれが非常に重苦しいことのように思われて返事しかねました。

「わしはいまなら誰たれのためにも命をやる。みみずが死ななければならんならそれにもわしはかわつてやっついていいのだ。」土神は遠くの青いそらを見て云いました。その眼も黒く立派でした。

樺の木は又何とか返事しようとしましたがやつぱり何か大へん重苦しくてわずか吐息といきをつくばかりでした。

そのときです。狐がやって来たのです。

狐は土神の居るのを見るところと顔いろを変えました。けれども戻るわけにも行かず少しふるえながら樺の木の前に進んで来ました。

「樺の木さん、お早う、そちらに居られるのは土神ですね。」狐は赤<sup>あかがわ</sup>革<sup>くわ</sup>の靴<sup>くつ</sup>をはき茶いろのレーンコートを着てまだ夏<sup>なつぼうし</sup>帽子をかぶりながら斯<sup>こ</sup>う云いました。

「わしは土神だ。いい天気だ。な。」土神はほんとうに明るい心持で斯う言いました。狐は嫉<sup>ねた</sup>ましさに顔を青くしながら樺の木に言いました。

「お客さまのお出<sup>い</sup>での所にあがって失礼いたしました。これはこ

の間お約束やくそくした本です。それから望遠鏡はいつかはれた晩にお目にかけます。さよなら。」

「まあ、ありがとうございます。」と樺の木が言っているうちに狐はもう土神に挨拶もしないでさっさと戻りはじめました。樺の木はさつと青くなつてまた小さくぷりぷり顫ふるいました。

土神はしばらくの間ただぼんやりと狐を見送つて立っていました。たがふと狐の赤革の靴のキラツと草に光るのにびっくりして我に返つたと思ひましたら俄にわかに頭がぐらつとしました。狐がいかにも意地をはつたように肩かたをいからせてぐんぐん向うへ歩いて居るのです。土神はむらむらつと怒おこりました。顔も物凄ものすごくまつ黒に變つたのです。美学の本だの望遠鏡だのと、畜生ちくしよう、さあ、ど

うするか見ろ、といきなり狐のあとを追いかけました。樺の木はあわてて枝が<sup>えだ</sup>一ぺんにがたがたふるえ、狐もそのけはいにどうかしたのかと思つて何気なくうしろを見ましたら土神がまるで黒くなつて嵐のよう<sup>あらし</sup>に追つて来るのでした。さあ狐はさつと顔いろを変え口もまがり風のよう<sup>に</sup>に走つて遁げ出しました。

土神はまるでそこら中の草がまつ白な火になつて燃えているように思いました。青く光つていたそらさえ俄かにガランとまつ暗な穴になつてその底では赤い焰<sup>ほのお</sup>がどうどう音を立てて燃えると思つたのです。

二人はごうごう鳴つて汽車のように走りました。

「もうおしまいだ、もうおしまいだ、望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡」

と狐は一心に頭の隅すみのところで考えながら夢のように走っていました。

向うに小さな赤剥あかはげの丘おかがありました。狐はその下の円い穴にはいろいろとしてくるつと一つまわりました。それから首を低くしていきなり中へ飛び込もうとして後あしをちらつとあげたときもう土神はうしろからぱつと飛びかかっていました。と思うと狐はもう土神にからだをねじられて口を尖とがらして少し笑ったようになつたままぐんにやりと土神の手の上に首を垂れていたのです。

土神はいきなり狐を地べたに投げつけてぐちやぐちや四五へん踏ふみつけました。

それからいきなり狐の穴の中にとび込んで行きました。中はが

らんとして暗くただ赤土が奇麗きれいに堅めかたられているばかりでした。土神は大きく口をまげてあけながら少し変な気がして外へ出て来ました。

それからぐったり横になっている狐の屍骸しがいのレーンコートのかくしの中に手を入れて見ました。そのかくしの中には茶いろなかもがやの穂が二本はいつて居とほうました。土神はさつきからあいていた口をそのまままるで途方とほうもない声で泣き出しました。

その泪なみだは雨のように狐に降り狐はいよいよ首をぐんにやりとしうすら笑ったようになって死んで居たのです。





# 青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1995（平成7）年5月30日11刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年11月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 土神ときつね

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>